

離島の旅客船および乗船ゲートにおけるバリアフリーの現状と課題

本研究は、離島と本土を結ぶ唯一の公共交通機関である旅客船と乗船ゲートについて乗下船の際の不便や、改善点を明らかにすることで、離島という特殊な環境下であり、かつ高齢化の進んでいる地域の高齢者や障がい者の社会参加を改善させる一手段となることを目的とした。

調査対象の船舶は、岡山県笠岡市の本土と真鍋島を連絡している三洋汽船株式会社の普通旅客船「ぷりんす」と高速船「せと」、兵庫県姫路市の本土と家島を連絡している高速いえしま株式会社の旅客船「まうら」とした。なお、比較対象として同社のバイアフリー船「しろやま」の調査も行った。調査対象の乗船ゲートは、笠岡港、真鍋島の岩坪港、本浦港、姫路港（2か所）、家島の宮港、真浦港の各港の乗船ゲートとした。

方法は、現地に赴いて実施した実測調査と質問紙法による船舶会社への択一解答式質問調査を行った。

過疎の進んでいる離島では、船舶や港が唯一の公共交通機関であるにもかかわらず、船舶側も港湾側も脆弱な現状（体制）であることがわかった。船舶自体においてはバリアが多数存在し、また、乗船ゲートでは、障がい者や高齢者だけでなく健常者にとっても危険を伴う可能性がある状態であるということがわかった。ソフト面に対しても口頭による指示だけであるため、適切で的確な作業手順ではない可能性が考えられる。しかし、真鍋島では人と人の触れ合いにより利便性や安全性を確保しており、心温まる場面が見受けられた。そして本研究を進めていく上で、ハード面とソフト面のいずれにおいても改善できるヒントが見つかった。そのため、今後の港湾整備において、港湾のバリアフリー化が進んでいき、障がい者や高齢者が利用しやすい港湾整備となっていくことを期待する。